

学位論文要旨

同一社会文化を背景とする
バイリンガルの説得のストラテジー
— キルギス語とロシア語の意見文の比較 —

広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
文化教育開発専攻 日本語教育学分野

D154235 西條 結人

I. 論文題目

同一社会文化を背景とするバイリンガルの説得のストラテジー
—キルギス語とロシア語の意見文の比較—

II. 論文の構成（目次）

第1章 序論

- 1.1. 問題の所在と研究目的
- 1.2. 論文の構成

第2章 先行研究

- 2.1. 同一社会文化における言語使用に関する研究
- 2.2. キルギスにおける教育と言語の関わりに関する研究
- 2.3. 説得を目的とした文章の種類
- 2.4. 説得を目的とした文章の比較研究
 - 2.4.1. 「文章構造」に基づく比較研究
 - 2.4.2. 「説得的アピール」に基づく比較研究
- 2.5. 先行研究に残された課題と本研究の研究課題

第3章 調査方法

- 3.1. 言語選択と使用に関する予備調査
- 3.2. 意見文調査の概要
- 3.3. 分析の枠組み
 - 3.3.1. 事実と意見の配置に基づく文章構造
 - 3.3.2. エートスと議論の型

第4章 事実と意見の配置に基づく文章構造

- 4.1. 分析方法
- 4.2. 分析結果
 - 4.2.1. キルギス語モノリンガル
 - 4.2.2. ロシア語モノリンガル
 - 4.2.3. キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）
 - 4.2.4. キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）
- 4.3. 考察

第5章 エートスと議論の型

5.1. 分析方法

5.2. 分析結果

5.2.1. キルギス語モノリンガル

5.2.2. ロシア語モノリンガル

5.2.3. キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）

5.2.4. キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）

5.3. 考察

第6章 総合的考察

6.1. 言語政策と説得のストラテジー

6.2. 言語使用と説得のストラテジー

第7章 結論

7.1. 本研究のまとめ

7.2. 日本語教育への示唆

7.3. 今後の課題

参考文献

III. 論文要旨

第 1 章 序論

1.1. 問題の所在と研究目的

「説得」とは、送り手が、主に言語的コミュニケーションを用いて非強制的なコンテキストの中で、納得させながら受け手の態度や行動を自らが意図する方向に変化させようとする（深田, 2002）行為である。送り手が望ましいとする方向に受け手の行動や態度の変容を促すという点で、他者に立ち入られたくない、邪魔されたくない欲求であるネガティブ・フェイス（Brown and Levinson, 1987）を侵害する恐れがあり、異文化間コミュニケーションにおいては特に慎重に行われる必要がある行為であると言えよう。

同一社会文化における人々の言語使用と社会には密接な関わりがあり、話者間の言語使用をめぐる価値観は異なる（トラッドギル, 1975）。特に旧ソ連諸国では、1つの社会において、基幹民族言語とロシア語への価値観が、ソ連時代とは変化しており、社会的な問題になりうる、もしくはすでに顕在化している可能性がある（堀口, 2018 等）。文章における説得に関する研究はモノリンガルに関する研究が行われており、言語ごとに固有の構造を有していることが報告されているが、2言語以上の言語能力を有するバイリンガルの説得の構造については明らかにされていない。

そこで、本研究では同一社会文化を背景とするキルギス語・ロシア語バイリンガルの文章における説得のストラテジーを明らかにすることを目的とする。

1.2. 論文の構成

本論文は全 7 章で構成される。第 1 章では、本論文における問題の所在と研究目的について述べる。第 2 章では、同一社会文化を背景とするバイリンガルの説得のストラテジーに関する先行研究を概観し、研究課題を提示する。第 3 章では、キルギス語モノリンガル、ロシア語モノリンガル、キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）、キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）の 4 群に対する言語選択と言語使用に関する予備調査の報告及び意見文調査の概要について述べる。第 4 章では、「事実と意見の配置に基づく文章構造」の観点から分析し、書き手がどのように主観と客観を書き分け、配置し、読み手を説得しようとしているのかについて分析する。第 5 章では、書き手が自身の信頼性に関わる説得的アピールである「エートス」をどのように構想しているか、そしてその「エートス」をどのような「議論の型」を用いて立論しているかという「エートスと議論の型」の観点から分析する。第 6 章では、本研究で得られた知見にもとづいて言語政策と実際の言語使用の観点から総合的考察を行い、第 7 章で本研究のまとめと今後の課題について述べる。

第2章 先行研究

2.1. 同一社会文化における言語使用に関する研究

本研究では、モノリンガルとバイリンガルが混在している1つの多言語社会における「個人的バイリンガリズム」の言語使用に着目した。同一社会文化における言語使用と社会には密接な関わりがあり、この点から先行研究を概観した。

2.2. キルギスにおける教育と言語の関わりに関する研究

キルギス社会では、教授言語別に行われている学校教育が、学校教育終了後の言語使用と言語コミュニティに密接に関係することが指摘されているため（Korth, 2005）、キルギスの教育と言語の関わりについて整理した。

2.3. 説得を目的とした文章の種類

説得を目的とした文章の分類について先行研究をまとめるとともに、本研究で用いた「意見文」の特質について整理した。

2.4. 説得を目的とした文章の比較研究

2.4.1. 「文章構造」に基づく比較研究

日本語教育の分野における文章構造を分析の枠組みとした異文化間の比較研究について概観し、「文章構造」に基づく比較研究における課題を明らかにした。

2.4.2. 「説得的アピール」に基づく比較研究

「説得的アピール」（Connor and Lauer, 1985）に基づく、「説得」を目的とした文章の比較研究（日本語、英語、スペイン語、ウズベク語）を概観し、先行研究における課題を明らかにした。

2.5. 先行研究に残された課題と本研究の研究課題

先行研究の課題をふまえ、本研究では意見文課題を用いて、同一社会文化における異なる言語話者の説得のストラテジーの特徴を明らかにする。そのために、次のような研究課題を設定した。

研究課題1: 同一社会文化を背景とした異なる言語話者は、意見文においてどのような「事実と意見の配置に基づく文章構造」を用いるか。

研究課題2: 同一社会文化を背景とした異なる言語話者は、意見文においてどのような「エートスと議論の型」を用いるか。

研究課題3: 意見文の「事実と意見の配置に基づく文章構造」と「エートスと議論の型」におい

て、キルギス語・ロシア語バイリンガルのそれぞれの言語的な優位性はどのように表出するか。

第3章 調査方法

3.1. 言語選択と使用に関する予備調査

本研究では、現在のキルギスの大学生の言語選択と使用の現状を改めて明らかにするとともに、意見文課題を策定するために、言語選択と使用に関する予備調査を実施した。

予備調査の結果、本研究において意見文調査を実施するにあたり、出身教授学校別に、使用言語の頻度が異なることが示唆された。したがって、意見文を書いてもらう際に、書く場面での使用言語の頻度に応じて、キルギス語モノリンガル、ロシア語モノリンガル、キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）、キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）の4群に分けておく必要がある。

3.2. 意見文調査の概要

先行研究の分析において書き手の意見が出現しやすい課題を設定する必要があると判断されたため、伊集院・高橋（2012）を参考に課題文を作成した。意見文課題はキルギス語、もしくはロシア語で収集し、データとしては筆者が日本語訳したものを使用した。調査は2019年1月から2月にかけて紙媒体で実施した。キルギスの3つの大学に所属する学生112名から回答を得た。

本研究で収集した意見文は、「キルギス語モノリンガル【キルギス語意見文】(KK)」「ロシア語モノリンガル【ロシア語意見文】(RR)」「キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）【キルギス語意見文】(KRK)」「キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）【ロシア語意見文】(KRR)」の4つのグループからなる。

3.3. 分析の枠組み

3.3.1. 事実と意見の配置に基づく文章構造

本研究では樺島（1983）に基づくツリーの構成要素に分類後、「導入」「本論」「結び」の3つの形式段落から成る文章を、「事実の報告」と「説明」から成る「事実・出来事の描写」と、「意見の陳述」と「論拠」から成る「書き手の意見陳述」にコーディングを行い、書き手が客観的な観点と主観的な観点をどのように組み合わせているか、各形式段落における分布を分析した。

4群それぞれの分析においては、文章の書き出しとなる冒頭文に着目し、書き手が冒頭文においてどのような構成要素を選択し、意見文を展開しようとしているかについても分析を行った。

3.3.2. エートスと議論の型

本研究では、書き手がどのように読み手の信頼性を得ようとしているかを検証するため、「エートス」に着目し、質的に分析する。「エートス」の分析の枠組みと判断基準は、Connor and Lauer (1985) 等の「信頼性のアピール」の定義や例を参考に、「書き手の直接的体験」、「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」、「書き手と読み手が共有する関心と視点」、「書き手の性格の良さ、判断力」を指標とし、分析を行う。

さらに、出現したエートスが、ロゴスとどのように関連しているのかを明らかにするため、Weaver (1970) の「ロゴス」の下位概念である「状況」「因果関係」「類似」「定義」の4つの「議論の型」(トポス)を援用し、分析を行う。

第4章 事実と意見の配置に基づく文章構造

4.1. 分析方法

3.3.1 節と同様である。

4.2. 分析結果

4.2.1. キルギス語モノリンガル

個々の意見文に着目し、1つの意見文の中で最も多く用いられていた要素の順に意見文の数を並べると、「意見の陳述」を最も多く用いた意見文が6編、続いて「説明」を最も多く用いた意見文が6編であり、「事実の報告」を最も多く用いた意見文が5編、「意見の陳述・論拠・事実の報告」が同数で用いられた意見文が1編であった。

KKの意見文の冒頭は書き手が「事実の報告」から書き出している意見文が多い。それぞれの意見文での「事実の報告」の内容を見ると、キルギス語の人称代名詞一人称複数 биз (biz)「私達」が用いられており、書き手と読み手の社会常識を共有しようとしてされていると考えられる。

4.2.2. ロシア語モノリンガル

RRの1つの意見文の中で最も多く用いられていた要素に着目すると、「意見の陳述」が最も多く用いられていた意見文が13編、続いて「事実の報告」が最も用いられていた意見文が7編、「論拠」が最も多く用いられている意見文が2編、「意見の陳述」および「論拠」がともに最も多く用いられた意見文が2編、その他にも「説明」が1編、「意見の陳述・事実の報告」1編、「事実の報告・説明」1編、「意見の陳述・論拠・事実の報告」1編、「意見の陳述・事実の報告・説明」1編であった。

冒頭文を見ると、「事実の報告」については、KKのように、人称代名詞一人称複数 мы (my)「私達」の使用や、所有代名詞 наш (nash)「私達の」が確認されるとともに、一人称複数代名詞

を用いず、書き手の常識を示すような文が冒頭で確認された。また、KK の意見文では見られなかった権威ある人物を引用することによる主張が確認された。

4.2.3. キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）

KRK の 1 つの意見文の中で最も多く用いられていた要素に着目すると、「事実の報告」が最も多く使用されていた意見文が 18 編、次に「意見の陳述」が最も多く用いられていた意見文 13 編、「意見の陳述・事実の報告」の 2 つの要素が同数出現した意見文が 5 編、そして「論拠」が最も用いられていた意見文が 1 編であった。

KRR の意見文の冒頭では、「意見の陳述」と「事実の報告」が同数で出現した。「事実の報告」については、RR と同様に、人称代名詞の一人称複数 мы (my) 「私達」の使用や所有代名詞 наш (nash) 「私達の」が確認されるとともに、一人称複数代名詞を用いず、書き手の常識を示すような文が冒頭で確認された。

4.2.4. キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）

KRR の 1 つの意見文の中で最も多く用いられていた要素に着目すると、「意見の陳述」を最も多く用いた意見文が 15 編と最多であり、続いて「事実の報告」が最も用いられていた意見文が 12 編、「意見の陳述」および「事実の報告」の 2 つの要素が同数出現した意見文が 1 編であった。

KRR の意見文の導入における一文目では、「意見の陳述」と「事実の報告」が同数で出現した。「事実の報告」については、RR と同様に、人称代名詞の一人称複数 мы (my) 「私達」の使用や所有代名詞 наш (nash) 「私達の」が確認されるとともに、一人称複数代名詞を用いず、書き手の常識を示すような文が冒頭で確認された。

4.3. 考察

本研究では、読み手を「書き手と同じ世代のキルギスの大学生」と設定したが、書き手が想定する読み手が異なり、キルギス語話者 KK と KRK はキルギス語話者とロシア語話者の二者、ロシア語話者 RR と KRR はロシア語話者の読み手を想定し、文章を書き進めた可能性がある。そのように仮定すれば、KK と KRK は、共通認識が異なるキルギス語とロシア語話者の両方の立場から説得するストラテジーを用いなければならない。共通認識は各文化に特有なものであり、普遍的真理であることが多い（リース, 2014）。同一社会文化においても共通認識が異なるため、意見の述べ方の選択が難しく、読み手に配慮せざるを得ないストラテジーを選択しているということも考えられる。

第5章 エートスと議論の型

5.1. 分析方法

3.3.2 節と同様である。

5.2. 分析結果

5.2.1. キルギス語モノリンガル

KK は、エートス「書き手の直接的体験」と議論の型「状況」、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「状況」、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「類似」を用いる例が確認された。

5.2.2. ロシア語モノリンガル

RR の「エートスと議論の型」では、エートス「書き手の直接的体験」と「類似」、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「類似」、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と「定義」が用いられている例が確認された。

5.2.3. キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）

KRK では、エートス「書き手の直接的体験」と「状況」、エートス「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」と「状況」、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「状況」、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と議論の型「状況」を用いている例が確認された。

5.2.4. キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）

KRR については、エートス「書き手の直接的体験」と「状況」、エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「状況」、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と「状況」、エートス「書き手の性格の良さ、判断力」と「定義」を用いる例が確認された。

5.3. 考察

本研究の結果から、「エートスと議論の型」の関わりにおいて、同じエートスの種類を用いたとしても、用いられるエートスの内容には差異があること、エートスを支える議論の型については、同じ言語を第一言語としていても、モノリンガルとバイリンガル間で書き手の主体性の強弱や、対象の本質への接近の仕方が異なっている可能性が考えられる。特に、その差異はロシア語話者（RR, KRR）において確認された。

第6章 総合的考察

6.1. 言語政策と説得のストラテジー

キルギスは法的には国家語のキルギス語と、公用語のロシア語の二言語をリンガフランカとする二言語併用社会である。所属民族言語とキルギス語、ロシア語の間にダイグロシアが存在しているが、ロシア語とキルギス語の間でもダイグロシアが存在する「入れ子ダイグロシア」(カルヴェ, 2010) である可能性がある。それらの言語間の関わりを見れば、実際の言語使用ではロシア語とキルギス語の間にはダイグロシアが存在し、ロシア語はキルギス語、ロシア語とキルギス語以外の所属民族言語に対して優位であることが考えられる。

6.2. 言語使用と説得のストラテジー

本研究の結果から、同一社会文化の例として取り上げたキルギスでは、バイリンガルの説得のストラテジーにおいて、法的な位置づけでは優位の言語であるキルギス語よりも、劣位のロシア語の方が影響を及ぼしていることが確認された。また、言語政策とモノリンガルおよびバイリンガルの実際の言語使用の実態は異なる。言語政策や法的な位置付けによる優位と劣位ではなく、社会的な実用性が要因となっており、劣位である言語話者は、優位である言語話者の影響を受け、優位である言語話者は劣位の言語の影響を受けにくいと考えられる。

第7章 結論

7.1. 本研究のまとめ

「事実と意見の配置に基づく文章構造」において、KK と RR, KRK, KRR の間で段落における「事実・出来事の描写」と「書き手の意見陳述」の出現比率に偏りが見られた。個別の要素に着目すると、バイリンガル (KRK, KRR) の意見文では、RR に見られた「意見の陳述」を多く用いる傾向があったことから、本研究ではロシア語の優位性が高く表出したことがわかる。

「エートスと議論の型」の観点からは、キルギス語話者はモノリンガル KK とバイリンガル KRK 間で使用する「エートス」が異なることが明らかになった。また、二群間で KK に見られない要素が KRK に見られた。立論形式としては、「状況」を用いる意見文が多く見られたことから、書き手は、主体性が弱く、非本質的な「議論の型」を好むと考えられる。

7.2. 日本語教育への示唆

本研究で得られた知見は日本語に限らず、外国語教育において、教師は学習者の第一言語や、これまで受けてきた教育の背景にも注目する必要があることを示唆している。書き手が読み手をどのように説得しようとしているか、説得のストラテジーの特徴を示すことで、日本語（目標言語）の「説得のストラテジー」を指導するとともに、学習者個々の第一言語での「説得のストラ

テジー」に着目することが可能になると考える。意見文を書く際に、第一言語での「事実と意見の配置に基づく文章構造」や「エートスと議論の型」が、教師から提示されることで、学習者が日本語だけではなく、意見文における説得のストラテジーの過程に着目することができ、より多角的な視点を持って意見文を書くことができると考えられる。

7.3. 今後の課題

今後は、データをさらに追加し、本研究の結論を検証する必要がある。意見文の課題としては、先行研究において課題文の指示が文章構造に影響を及ぼすことが示唆されていることから、課題文の提示方法や研究者からの調査時の指示に留意することが必要である。課題での指示を変更してデータ収集を行い、今回の研究結果と比較することも必要であると考えられる。

参考文献

- 伊集院郁子, 高橋圭子 (2012) . 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴—「主張」に注目して—」『日本語・日本学研究』 2, 1-16.
- 樺島忠夫 (1983) . 「4. 文章構造」水谷静夫 (編) 『朝倉日本語新講座 5 運用 I』 (pp.118-157) . 朝倉書店.
- カルヴェ・ルイ＝ジャン (2010) . 『言語戦争と言語政策』砂野幸稔, 今井勉, 西山教行, 佐野直子, 中力えり (訳) 三元社. (Calvet Louis-Jean (1987) . *La guerre des langues et les politiques linguistiques*. Editions Payot.)
- トラッドギル・ピーター (1975) . 『言語と社会』土田滋 (訳) 岩波書店. (Trudgill Peter (1974) . *Sociolinguistics: an introduction*. Penguin.)
- 深田博己 (2002) . 「第 1 章 説得研究の基礎知識」深田博己 (編) 『説得心理学ハンドブック—説得コミュニケーション研究の最前線—』 (pp.2-43) . 北大路書房.
- 堀口大樹 (2018) . 「インタビュー調査に基づいたバルト 3 国のロシア語系住民の言語状況の考察」『スラヴ文化研究』 16, 1-21.
- リース・サム (2014) . 『レトリックの話 話のレトリック—アリストテレス修辞学から大統領スピーチまで—』松下祥子 (訳) 論創社. (Leith Sam (2011) . *You talkin' to me? : rhetoric from Aristotle to Obama*. Profile Books Ltd.)
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) . *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Connor, U. and Lauer, J. (1985) . *Understanding Persuasive Essay Writing: Linguistic/Rhetorical Approach*. *Text*, 5 (4) , 309-326.
- Korth Britta (2005) . *Language Attitudes towards Kyrgyz and Russian; Discourse, Education and Policy*

in post-Soviet Kyrgyzstan. PETER LANG.

Weaver, Richard M. (1970) . Language is Sermonic. In Johannesen, Richard S., Strickland Rennard and Eubanks, Ralph T. (Ed.) . *Language is Sermonic: Richard M. Weaver on the Nature of Rhetoric* (pp.201-225) . Louisiana State University Press.